地域文集草創期にみる編集とその意義
－『作文宮城』発刊からの10年間を中心として－

The importance of editing in the early stage of the regional collection of compositions
— Focusing on the first ten years of "Sakubun Miyagi" —

今野　和賀子
Konno Wakako

キーワード：『作文宮城』，文章ジャンル，生活文，文集活用
Keywords: "Sakubun Miyagi", text genre, seikatubun, practical use of collection of compositions

要　約

本研究の目的は，草創期の『作文宮城』の歩みを振り返り，その意義を明らかにすることである。方法は，創刊から10年間の『作文宮城』を対象に，掲載作文のジャンル分析と，書き方指導に関する内容の抽出を試みた。結果，草創期には生活文とともに，論理的文章系列や日記・手紙，創作文系列の俳句・脚本・リレー童話等，国語科学習から生まれた多様なジャンル作品とそのワンポイントアドバイスや編集上の工夫が施されていた。今に生きる地域児童文集『作文宮城』の有効活用による書くこと指導活性化への可能性が示唆された。

1　『作文宮城』研究の意図

大内（1984）は「戦後の作文教育は，文集の制作と共に始まった」(＊1) とする。戦後初の作文指導の系統性を示した昭和26年版学習指導要領「国語能力表　四　書くことの能力（作文）」(＊2) は，「身近な生活の報告や記録を主とした簡単な文を書く」「飼育栽培などの長期にわたる記録」「多角的に取材してまとまりのある生活日記を書く」「自分の生活を反省し，文を書くことによって思索する」など，児童の日常の表現活動を豊かにし表現技術を高めることで生活の向上も視野に入れていた。しかし，この新しい作文指導は実用主義的，表現技術的面を強調していると批判され，順調に普及したわけではなかった。

昭和26年は戦後の生活綴り方復興の年でもあった。いわゆる作文・生活綴り方教育論争については，大内（1993）『戦後作文・生活綴り方教育論争』(＊3) に詳しい。形式か内容かという古典的対立図式を内在し，表現指導か生活指導かという二極対立論議がなされた。その頃，全国では児童・生徒作文集が学級や学校規模，さらには郡市県全体として続々と刊行された。この背景には昭和26年に始まった全国文集コンクールの存在がある。

今回，研究対象として昭和27年度末に発刊された地域文集『作文宮城』を取り上げ，特に発刊後10年間に焦点を当てて分析を試みることにした。

『作文宮城』は，昭和28年3月に当時の宮城県小学校国語教育研究会長 山内才治の唱道によって発刊されて以来，現在も続く宮城県内の小学生の作文集である。70年間にわたって途切れることなく宮城県連合小学校国語研究部会が編集発行してきた。募集は夏休み明けに締め切られ，県内各地区の審査を経た優れた作品が各学年・ジャンルごとに掲載されている。掲載と国語科授業における実践の相関関係は必ずしも十分とはいえないが，各校の担任が当該時期までに書かれた作文の中から選んで応募することを踏まえると，県内の作文指導の変遷や傾向を物語る資料としての価値を十分に有していると考える。

表１　　『作文宮城』の系譜　略年表

昭和28年（1953）	３月『**作文宮城**』創刊（上･下学年）　以降毎年度刊行
30年（1955）	地域文集銀賞受賞（日本作文の会）
35年（1960）38年（1963）42年（1967）	地域文集特選賞受賞　学年分冊に
49年（1974）	作文風土記『みやぎの子ども』（作文宮城第20巻学制百年記念）刊行
54年（1979）	『詩をかくみやぎの子ども』刊行
56年（1981）	博報児童教育振興会から博報賞受賞
58年（1983）	作文風土記2『みやぎの子ども』1･2･3年／4･5･6年　刊行
平成24年（2012）	作文宮城60号記念特別編『あの日の子どもたち』東日本大震災記録集 刊行
29年（2017）	作文宮城65号記念特別編『あの日の子どもたち』同第2集 刊行
令和 4年（2022）	『作文宮城』70号刊行

特に発刊後10年間の作品は，生活綴り方の影響を受け，労働の担い手としての子どもの姿を描いた「生活文」が多くを占める。「この頃の作品の良さは技巧のそれではなく，自分を動かして表現をひきしめ真実性を伝えている。働くみやぎの子どもの作品もやや暗い子どもの印象を受けるが，しばらく生活作文が『作文宮城』の主流をなしていた」(＊4)。続いて「おでかけ」作文時代が到来し，「みじめさ，暗さを感じさせなくなる」のが，昭和38年刊第11号以降である。このことから，本稿では発刊からの10年間を草創期と捉えることにする。

第4号5・6年編では，当時の応募作品の傾向について以下のように説かれている。(＊5)

> 生活文と比較して，記録文・感想文などの作品が非常に少ないのは本当に残念ですね。特に観察文，通信文，研究報告の文など皆さんのふだんの学習と非常に関係の深い作文が一篇もなかったのはどうしたことでしょう。その中で，劇の脚本や研究文などはさびしい道に一点のともしびを掲げてくれました。（中略）日記や生活文を書くことによって心を深く見つめる目を養うとともに，その目を外にも働かせて周りの人や物，事柄，事件をしっかりとらえ，それを自分の心にうつして考えてみるという生活の態度も高めてください。

発刊当時の昭和26年版学習指導要領（試案）書くことの能力（作文）では，生活の報告や記録，礼状・招待状，飼育栽培などの記録，調査・研究をまとめた記録や報告の文，物語や脚本，映画・演劇・放送などについての感想や意見，本についての紹介・鑑賞批評の文等，様々なジャンルが書く技能とともに示されていた。それらを意識した「書くこと」指導を行き渡らせるため，『作文宮城』の編集後記等において上記のような指導言は実に創刊号から約20年続いた。

そして，『作文宮城』に見られる「生活文」とその他のジャンルの作文の問題は，70年後の現在も十分に克服されたとは言えない状況にある。なぜなら現在も依然として，掲載作品が結果的に「生活文」に大きく偏る傾向が見られるからである。

さらに，文集の利活用という面からみると，県下に行き渡り支持を受け活用され始めるようになったのは第４号頃からであったという（＊6)。その後一部を除いて購買数は思ったように伸びず，文集が児童にとって読む必要感を感じられないものになっていることが予想される。また，「書くこと」指導においても，『作文宮城』を教材として活用しようという動きは単発的に留まっている。

大内（1996）は文集づくりの際の問題点の多くは，文集づくりの目的のあいまいさに端を発して生じており，文集を〈作文学習書〉〈作文指導書〉として機能させるための方法論の検討は，従来，断片的になされてきてはいるが，必ずしも十分とはいえないとした（＊7）。また，本澤（2017）は，地域文集を教材として「生活文」指導を行うための，作者にあてて手紙を書く学習指導実践を具体的に提案している（＊8）。

草創期の『作文宮城』が模索しつつ歩んだあとを振り返り，その意義を明らかにしたい。「作品集」にならざるを得ない地域文集の編集や利活用の工夫が，「書くこと」指導の活性化と児童の文章表現力向上に寄与する方途の一つになると考えるからである。

2　『作文宮城』の草創期の姿

本稿では，昭和28年3月発刊からの10年間を草創期と捉える。理由は前章に述べたとおりである。

第3号に寄せられた賛辞から当時の仙台市教育委員会 千葉徳二の言を引く（＊9）。

> 子供の生活がここにある。子供の作文がここにある。どの子も生き生きと自分を語っている。『作文宮城』は，私達の仲間が生んだ貴重な実践記録である。子供達が読めば，書く意欲が高まるだろう。教師が読めば，実践への情熱がかきたてられるだろう。
> 『作文宮城』は，伸びていく作文指導の道標である。

以下，1）創刊号の編集，2）文章ジャンルの扱い，3）書き方を身に付け活用を促進させるための編集の工夫　の3つの観点から草創期の姿を捉えていくことにする。

2－1　創刊号の編集について

（1）巻頭言　　山内は以下のような「発刊のことば」を寄せている（＊10）。

> わたくしは率直に言って，綴り方といわれていた頃にくらべて，いまの作文教育は決して盛んであるとは思わない。国語教育の中の作文の占める位置は，話す・聞く・読む・書くなどと均等の位置を占めているどころか，実はこの能力は他の教科の分野においても極めて重要な役割をもつている筈なのに，なぜに振わないのであろうか，わたくしはいつも不審にしていた。
> わたくしは，徒らにむかしを懐かしむものではないが，かつて作文における宮城の名は，実にさくさくたるものがあった。しかるに今どうしてこうもかげがうすいのであろうかと，ひとりなげいてもみた。ところが，本会の役員会などでしばしば話合いの結果，ここに全県下小学校のご協力を得てこの文集『作文宮城』を刊行する運びになって，わたくしが日頃いだいていた不審もなげきも，立ちどころに消え去ったのである。わたくしは，県下各地からよりによって持ちよられた原稿の山が，そのどれを手にとってみても，まさに珠玉の篇だけであるのに驚くと同時に，さきに抱いた心配が全く杞憂であったことを喜んだ。
> このように，本文集は戦後における本県小学校作文教育の最高水準を行くものであると自負する一方，真の作文教育が県下各地区すみずみまで浸透して熱心に実践されている現状を深く喜ぶものである。ねがわくは本文集を突破口として，この後ともいよいよ作文教育に精進され，作文宮城の金字塔をうちたてられんことを祈って，発刊のことばとする。

山内自身は，宮城師範附属小学校訓導時代に，明治43年から続く学校文集『ふたば』

や学級文集『イチゴ』『ドングリ』(＊11) 等の編集・活用に携わっている。昭和6年から16年までの東京高師附属小学校時代も学級文集『紙鳶』などを残している。昭和30年に退職後も全国行脚して国語教育における全国的指導者として活躍した。創刊号の編集の陣頭には，終始山内が自ら当たり，装丁やカットの選定・配置まで細かな指導を行っている。

巻頭言中の「作文宮城の金字塔をうちたてられんことを」の言葉には，この文集をよりどころとした県下の作文教育の発展に対する強い思いを感じ取ることができる。なお，山内が記した『作文宮城』の題字は70年後の現在も使われ続けている。

第1号は，下学年・上学年編の2分冊で，各々84編，87編の作品が掲載された。その中から3年生の推薦文と2年生の作文に対する評価言の一部を引く。

（2）推薦文の例　　3年　吉野久代　題「ぶんしゅう」(＊10)

（前略）今日わたされた文集「ぬまべの子」をだして，うしろにかくして母ちゃんの前にいき，「母ちゃん，いいものみせっけ」とわらいながらいいました。「なんだべな，さよのいいものってな，母ちゃん」と父ちゃんがいったので，「ほら」といって，こたつのうえに「バサッ」と文集をおとしました。「ああつづりかたか，なんぼじょうずにかいたかみっかな」と，母ちゃんは，はりばこをこたつの上からござのうえにおろしました。「どれ，どれ」といって，とうちゃんはみていたしんぶんをおいて，文集をめくりました。　（略）

私はほめられたのでうれしくなりました。「うん，先生がよげいなとこだのとったり(ママ)，じゅんじょをなおしてけだりしたんだ」と私はいいました。「さよバスガールになったら，母ちゃんさ，あかぎれのくすりよりも早くりっぱないえでもたでけろや」「とうちゃんなれせびろのふくかってけろなや」と，父ちゃんと母ちゃんがわらいながらいいました。　（略）

心の中では，つづり方をまたうまくかいてよろこばせようとおもっていました。

（3）評価言の例　　○　2年生の作文を読んで (＊10)

読んでよくわかる作文を書くには，くわしく書くことが大切です。それには，いつもよくものをちゅういして見ていなければなりません。

1　ありのままを書きましょう。/ 2　見たこと，きいたことにたいしては，自分の思ったこと，かんじたことを書きましょう。/ 3　ほかの人の心もちがよくあらわれていると思われることばは，のがさずに書き入れましょう。 なお，このほかに，

1　いろいろな作文を書きましょう。自分たちのせいかつをしらせる作文のほかに，もっと手紙・草木をかんさつした文・日記・どこかを見にいった時の文・しらべた文・なにかをつたえることばなどいろいろあるでしょう。

2　どんなことでも，文しょうに書きとめておくばあいは，みな作文です。先生のちゅうい・朝のおはなし・みんなにおしらせすることば・りかやしゃかいでしらべたこと・しごとのけいかくなどみなそうです。ちゅういしたことをまもってまとめておきなさい。作文の力を大きくのばしてくれます。

（4）考察

（2）吉野さんの作文「ぶんしゅう」の中の父の夢は〈せびろのふく〉，母の夢は〈りっぱないえ〉である。日曜も休むことなく空模様を案じながら薪を背負いに山へ行かねば

ならない母を案じて，わたしは〈大きくなったらバスガールになって，くすりを買ってあげたい〉と願う。東北に種が蒔かれた「生活綴方」を受けた戦後の「生活文」の典型例の一つといえる。厳しい現実の生活と向き合い，解決のために綴り方や勉強を精一杯頑張ろうという意気込みと，学校文集『ぬまべの子』に作文が掲載されたことへの純粋な喜びがあふれている。文集を家で父母に見せる様子が会話文や行動描写によって目に見えるように生き生きと書かれており，作品解説でもそういった表現面の特色が紹介されている。

（3）2年作文評価言後段では，生活文以外の文章ジャンルへの目や「書くこと」の生活化への提言がなされている。昭和26年版学習指導要領に示された各ジャンルを低学年から意識させ，億劫がらずに「書くこと」の機会を増やし作文力の向上につなげることを呼び掛ける内容になっている。

2－2　文章ジャンルの扱い

全学年にわたって目次に文種が示されたのは第4号1956年刊からである。推薦文数も，年度によって各学年1～4点と幅が見られる。

（1）複数の推薦文

第1章に引いた第4号評価言にある「さびしい道に一点のともしびを掲げ」た研究文は，この年の推薦文となっている。第4号は初めて生活文以外のジャンル作品が推薦文になった記念すべき号でもある。それは母へのインタビューを基にまとめた「僕の家の歴史」と題する報告文で，その後もしばしばこのテーマは『作文宮城』に登場することになる。家系を知るという魅力的なテーマが高学年児童の関心を高めたのだろう。第7号の推薦文は「ぼくの工作」という廃物利用による戦車の工作過程を説明する文章，第13号では初めて詩が推薦文に加わっている。

表２　『作文宮城』第6学年　掲載作品数と文章ジャンルの推移

発刊年・号 / 数・ジャンル	1956年刊 第4号	1959年刊 第7号	1962年刊 第10号	1965年刊 第13号	1971年刊 第19号	1999年刊 第47号	2020年刊 第68号
掲載作品総数	30	47	39	55	58	78	56
推 薦 文	2	1	2	4	2	1	1
生活文	1	0	2	3	1	0	1
記録・研究・意見他	1	1	0	詩 1	1	1	0
生 活 文	13	20	19	27	14	39	41
学校生活	1	4	4	5	1	12	4
家庭生活	4	7	11	14	4	11	自分を見つめて6
家族	6	4	3	4	6	6	15
体験	2	5	1	4	3	10	16
作文総数に占める割合	**68%**	**71%**	**63%**	**57%**	**30%**	**68%**	**93%**
記録文（観察・見学）	0	0	1	6	0	0	0
報告文（調査・研究）	1	3	4	0	6	4	1
意 見 文	0	0	1	1	4	2	1
紀 行 文	0	1	1	4	7	5	0
感 想 文	2	1	3	6	7	2	0
日 記 文	2	1	1	2	4	0	0
創作文（短歌・俳句含）	俳句 5	俳句7 物語1	0	1	短歌1 物語2	5	1
詩	6	11	9	8	11	21	12
手 紙 文	0	2	0	0	2	0	0
そ の 他	脚本 1	0	0	0	0	0	0

表２を見て分かるように，文集中最も目を引く推薦文として取り上げることによって，生活文以外のジャンルへの意識の向け方や具体的な書き方の紹介が可能になった結果，草創期の短期間に各ジャンルに満遍なく一定レベル以上の作品が掲載されるようになっていったことが分かる。

毎号繰り返された生活文以外のジャンル作文への言及は，第10号では次のように変化している（＊12）。

> Ｙ：「内容から見ると，題材が年々明るくなったと思いますが。」／ Ｒ：「明るいね，確かに。台風のことなどあるけれども，それだってひところのように，救いがたい絶望感というものでなく，何か希望に向かって立ち上がろうとするたくましさがあるね。」／ Ｙ：「紀行文と，研究発表の文は昨年あたりからよくなってきたが，今年はぐっと充実してきた感じだね。」Ｒ：「そう，研究の対象が幅広くなっていることはいいことだね。伝説調べとか，ことば調べとか，こういったものがこれからもどんどん出てほしいね。」／ Ｙ：「中には30枚以上という紀行文もあったし，生い立ちの記も15枚というのも出ている。5，6年では長い文を書くことから2，3枚の短いが，きりっと充実した表現ができるという練習も，非常に大事のように思うね。」／ Ｒ：「そのためには，ことばを選び分けて使う気持ちと，選ぶことができる力を養うことが大事ではないかと思います。」／ Ｙ：「つまり，骨格に筋肉をつけ，皮膚を作っていくというように，ことばをふやしながら詳しくしていくという方法と，大木をのみや刀でけずりながら，だんだん形をはっきりさせていくという，二つの方法 ―このどちらも大事なんですね。」　（略）
>
> ※下線は今野が付記

この対談形式の「選を終えて」からは，創刊から10年を経て紀行文や研究報告文で良い作品が生まれるようになったことや生活文以外のジャンルの充実について，加えて作文上達法の考え方が分かりやすく伝わる。伝説調べやことば調べなど，国語科らしい調べ学習の成果が，「調査・研究報告文」として第10号に掲載されたことは特筆すべきことだったと考える。草創期10年間の一つの到達点でもあったことがうかがわれる。

また，10年間文集作りに関わってきた編集者の対談形式であることも，編集上の特色の一つと言える。これによって，読者である児童や教師は『作文宮城』の創刊からの変容の一端を知り，編集者の思いを親しみをもって受け止めつつ，今後の作文のあるべき方向性や作文の極意を感じ取ることができたのではないだろうか。

（２）生活文と他ジャンルの作文

常に中心的な存在だった生活文について，その掲載数の推移からみていく。詩・短歌・俳句を除く掲載作文総数に占める生活文の割合をみると，第4号の68％から第10号では63％と徐々に下がっていき，第19号では30％にまで減少している。

内訳を見てみると，「学校生活・家庭生活」に比べ，当初20年間には少なかった「体験」が，最近20年間で著しく増加している。昭和40～50年代のいわゆる「おでかけ」作文時代に紀行文がピークを迎えた後，子どもたちを取り巻く社会や自然・情報環境等の変化によって，ボランティアやスポーツ，音楽など体験の幅も広がりをみせ，それらを通して学んだことなどをまとめた生活文が増えていったことを示している。

第19号は生活文の割合が最も低い。さながら文章見本帳の趣を呈している。特に「論説文」や「紀行文」によい作品が多数あり，「鮮やかなタッチでよく書き込んでいる」と

大変高評価がなされている。一方で，個性的な感動を大切にした「日記」や「手紙文」は「不作」と断言している。そして，日記によって「あなたの生活を大切に育てましょう」「手紙の消えてしまうのは惜しいことです。改めて手紙のよさを考えてみましょう」と，読者に日記や手紙をもっと積極的に書くよう呼び掛けている。

論説文や紀行文に比べ，生活文や日記・手紙・詩等の自己表現系の作文に良い作品が少ないとする評価は，明確な主題・構成・相手意識をもち生活を掘り下げ熟考した生活文や手紙文，言語感覚を十分に働かせ言葉にこだわった詩作品等を要求したものと捉えることができる。

創作文の系列では，創刊号から俳句や劇の脚本，映画やラジオ番組の感想，読書感想のグループ交流を文字化し感想文と組み合わせた作品など，新たな試みやバリエーションが生まれている。〈教科書単元の発展として，実際に児童が地域の伝説を集め，紹介・説明したもの〉と付記された作品や短作文なども散見される。

以下に第4号に掲載された5年生の作品（＊13）から一部を引く。

このごろ思う事　　5年　中鉢龍一郎

一　二三日前ラジオの録音ルポルタージュで，「百姓の歌」というのを聞いた。ある東北の山村の小学校の先生が，子供たちの生活を紹介したのである。田舎の子供たちが作った詩を録音して，先生がそれに説明を付け加えていたのである。方言だからよくわからなかった。（略）この山村の子供たちがこんなみじめな生活を送らねばならないのかという事を考えると，とてもたまらない気持ちがする。今年は米が大豊作だそうである。あの「百姓の歌」を作った子供たちも，さかなが腹いっぱい食べられるようになることを，心から願っている。　（略）

四　文化くん章を東北大学の増本先生がいただいた。新聞にのった写真を見ると，体格のいいりっぱな人だった。すきな研究をして一生けん命努力してくん章をいただくなんてうらやましいと思った。

五　五年生になって，何とか新聞も読めるようになり，世の中のこともほんの少しは分かるようになった。ぼくなんかの考えも及ばないような出来事が山ほどあるらしい。「早く大人になってもっといろいろな事を知りたい。」「このままで，学校の勉強にだけ心を向けていればいい。」という二つの反対の気持ちがぼくの胸に住んでいて，かわるがわる出て来るようである。しかし，一年一年とぼくの体も心も成長していることは確かである。

端的で明快な文章で，一から四まで社会の動きを捉えて述べた後で最後に自分の気持ちでまとめている点など，構成も工夫されて高学年らしい。この作文の評価言には，「世の中のことに対して目を広げ，考えや意見を自分の言葉で短くまとめた作文がもっとたくさん生まれてほしい」と添えられている。

当時の5学年教科書（昭和27年『一～六年生の国語』志賀直哉他編学校図書）には，例えば農民の危機を救った東北大学歯車学者成瀬博士を描いた伝記教材や，「学級新聞を作ろう」「げきを作ろう」等の作文単元があった。生活文全盛時代にあって，論説文・短作文系作文指導の模索の一端がここに明確に示されているといえよう。

（3）「生活文」のおさえ

ここで，そもそも「生活文」とは何かについて確認しておく。「生活文」とは，「子ど

もが生活の中で経験するさまざまな事象をとらえ，その事実や，事実について感じたり考えたりしたこと等自分なりの言葉で記述した文章。自己表現の作文の一つで，社会的実用性には直結しない。生活文は，文章表現力の基礎を培うという見地から小中学校，特に下学年段階ほど重視される。また，自己表現であるところから豊かな心情や思考力の育成を目ざす内面的な耕しにも役立てられる」。(＊14)

戦後まもなくの学習指導要領では「生活文」の捉え方が異なっている。昭和22年版学習指導要領では，「生活文」を，あらゆる書く活動や経験の基礎にあるものとし，その上に様々な文章の種類（ジャンル）が位置付けられている（＊15)。それに対して昭和26年版学習指導要領では，「生活文」を「記録文，報告文，意見文，……」等と並列する文章の種類（ジャンル）の一つとして位置付けている。

『作文宮城』第2号4･5･6年編の編集後記では，当時の「作文」か「綴り方」かの論争を止揚する「××学校」そっちのけの名篇が「作文宮城」に数多くあることや，創刊号から一年間のめざましい躍進に対する自負が，赤裸々に語られている。なお，先の論争とは，1951年に山形県山元中学校2年生43名による文集『山びこ学校』（無着成恭編）や『山芋・大関松三郎詩集』（寒川道夫編）などがベストセラーになり，戦後復活した生活綴り方を発展させようとする考え方に対して，「生活綴り方は作文教育か」という問いかけがなされ，交わされた論争をさす。

（4）生活文の書き方に関する言及

『作文宮城』第4号において，「生活文」の書き方について解説している箇所（＊16）がある。

> 5・6年の皆さんへ　－生活文について－
> 集まった作品500点ほど，毎年すぐれてきていますので，とりあげるのにこまりました。生活文についてこれからのために，二三言言わせてください。
>
> 1　自分の立場からだけの考察でなく他の人の身にもなって考えてみる。－5年の推薦文のように
> 2　父母や兄に言われてすぐひき下がる作文で，なぜそうなるのかと考える点が必要です。
> 3　仕事を書いてもつらい苦しいと言うだけでなく，そのわけをもっと思いつめてみる。
> 4　子供会などの問題を，みんなで解決してゆくところなどがあってほしかった。
> －題目の拾い方をもっとひろげて－
> 5　運動会，遠足，日記などについて，中心を決めてあとは省くといったことも身に付けてほしい。
> 6　15枚ほどの長い文が相当あったが，中にはだらだらととりとめもなく書いたものが大分あった。すらすらと達者に書けるということだけでなしに，何度も書き直したり，苦労したりしてゆくとき，人に強くうったえるものが生まれると思うのです。

現行学習指導要領の言葉を当てはめれば，1～3：【考えの形成】陥りがちな主観的・表面的な見方・捉えへの警鐘，4：【題材の設定】子どもなりの公の場で協働的な課題解決などのテーマを積極的に取り上げること，5･6：【記述】伝えたいことの中心を明確にもって，詳述・略述を意識して書くこと，【推敲】容易に長文が書けてしまうことに安心せ

ずに，目的・相手を意識して一度書き上げた文章を磨く努力を怠らないこと，ということになるだろう。

（5）生活文の落とし穴

「生活文」について，菅原（2011）は生活と対峙するという固有の意味と内容を持ちながらも，曖昧で多様に解釈される余地を持ち続けてきたがために，逆に広い支持を得，わが国の作文教育を特徴づける独自の術語として，今も根強く使われることにつながったとみている（＊17）。

生活文は，文章表現力の基礎力を養う一方で，多様な形態が混在し文種的には未分化（描写・説明・報告・感想・意見）である。例えば，前掲の創刊号2年生の作文に対する評価言にあるように，生活に題材を取って「くわしく」「ありのまま」に作文を書かせようとするとき，それは自ずと説明や描写表現を求める。

説明表現に関していえば，これは生活文だけでなく感想文にも意見文にも当たり前に混入している。独立したジャンルとして説明文を一斉指導の対象にすることが少なかった時代もあったが，現在は低学年から紹介文や記録文，3年生からレポートの書き方のような形で教科書で扱われるようになっている。教師は説明のどんな筋道の立て方が書く内容に合うかを指導し，個々の子供がどの構成の形を選んでいるか，説明対象の理解や取材は十分かを一人一人に応じて指導する必要がある。

ジャンルや相手，目的にふさわしい書き方を身に付けさせる個に応じた指導が不足すれば，「書くこと」の能力の向上は望むべくもない。

表3　令和2年度版 第6学年国語科教科書作文単元と文章ジャンル　（3社について）

	作文単元名	生活文	物語	随筆	詩･句	説明･報告文	実用文	意見文
A社	防災ポスターを作ろう						○	
	世界に目を向けて意見文を書こう							○
	心が動いたことを十七音で表そう				○			
	「卒業文集」を作ろう					○		
B社	たのしみは				○			
	私たちにできること							○
	日本文化を発信しよう						○	
	大切にしたい言葉			○				
	思い出を言葉に				○			
C社	随筆を書こう			○				
	パンフレットで知らせよう						○	
	物語を作ろう		○					
	自分の考えを発信しよう							○
	書評を書いて話し合おう					○		
	言葉と私たち							○
	ひろがる言葉					○		

表3は現行主要3社6学年教科書の作文単元をまとめたものである。説明文・報告文・実用文・創作系（物語・随筆・詩・俳句）等，各ジャンルの書き方を扱う単元が設定されている。前掲表2の『作文宮城』掲載作文における生活文の割合の変遷と比較するとき，ジャンル指定等作品募集や編集の在り方を工夫する必要があることが示唆されるだろう。

2－3　書き方を身に付け活用を促進させるための編集の工夫

（1）読者が自由に書き込めるページの挿入

第10号5･6年編の編集後記の前には，空白の1ページが設けられている（＊18）。他のページと異なり，「君のページ・あなたのページ」と横書きの題が付されている。

その直前まで児童の入選作文や「載せかねた良い作品」の紹介，カットや指導言などでぎっしり埋まった文集の最後に，予想外のページが突然現れる。遊び心のあるこのような作者と読者または編集者と読者を結びつけるようなページが設けられていたことは大変興味深い。純粋に上手な作文の作品集としての機能から，選択的かつ任意ではあるが，読者を書き手と編集者との新たな関係性の中に引きずり込んで，書き手＝表現者に導く機能が付加されているという言い方もできるのではないか。

君のページ・あなたのページ

（＊空白ページの最下部左寄せで，以下の文言が記載されている。）
ここは，あなたが自由に使ってよい場所です。
○作文を読みながら，ふと思いついた作文の題。材料，…など。
○作者にあてて出したい手紙の下書き。
○編集者に出したい質問や注文などの下書き。
むだにしないでぜひ使ってください。

平成20年版学習指導要領では，高学年「書くこと」の言語活動例の一つとして「編集」が挙げられていた（＊19）。第10号のフリーページの内容を受けて例えば，編集者宛てにもっとこのような文集にしてほしいと児童が依頼する手紙を書くことは，編集という地味ながら不可欠な行程や編集者の思い・苦労に思いを致す格好の機会となる。そしてそれは学級活動や児童会活動等における一枚新聞・学級文集・児童会広報紙等の編集に生かされる可能性を持つものだろう。

また，例えば文集に掲載された作文の中から，読み手の児童一人一人が最も共感した作品を一つ選んで話し合ったり，理由を明確にしてその作者に宛てて手紙を書いたりするという言語活動も考えられる。相手意識や目的意識を明確に持てること以外に，評価意識を持って県内他地域の児童の作文を読み，良さを見出して手紙の形式にのせて書くことは，高学年らしい価値ある言語活動となるだろう。

このページの存在は，現代において児童が確実に文集を手に取り，掲載された多くの作品にそれぞれの個性とおもしろさを見出し，次の「書くこと」につないでいくためのヒントを提供してくれる。単に文章を書きあげることだけでなく，書く前の伝えたいことを練り上げる段階や書いた後のコミュニケーションを活性化することが，トータルとして思考力や表現力の育成につながり「書くこと」の力を押し上げていくと考える。

（2）作文の書き方を示すコーナーの設定

推薦文に対する解説や学年ごとの総評など以外に，テーマやジャンル別にその書き方のヒントがコンパクトな形で挿入されるようになるのも，第4号からである。

〈動物のこと〉
○生き生きと，動物や人物のようすをえがきだそう。
○くわしく見て，とくちょうを表そう。
○自分の感想を大切にしよう。
〈家族のこと〉
○ふだんの姿や行い，ことばに注意してみよう。
○長い文は区切って書くのがよい。
○順序立てて書くのはとても大切。
○何度も読み返して良い文にしよう。（＊13）

第9号では，以下のような書き方のワンポイント解説（＊20）が計4箇所に入っている。このような解説コーナーは，第12号以降の「書き表し方ワーク」へ発展していくものと捉えることができる。

〈感想文の傾向〉　◇　あなたの書いた感想文は，次の5つのうちどれに入りますか。
1　あらすじだけを書いているもの
2　あらすじにちょっぴり感想をつけ加えたもの
3　感想を主にして書いているが，深い読みがなされていないため薄くつまらないもの
4　生活経験と結びつけているが，作品の主題をつかんでいないもの
5　作品の主題をすっかり自分の生活の中に取り入れているもの

3　草創期の『作文宮城』に見る意義

3－1　文章ジャンルの扱い

生活綴り方の影響を受けた「生活文」の語は，『作文宮城』において推薦文の一ジャンルとして明示される時期を経て，「学校生活」「家庭生活」「社会生活」「自分を見つめて」など題材別に示されるようになる第5号以降には全く見られなくなる。

第4号以降の目次に文章ジャンルとして明示されるのは，低学年では「観察記録文」「日記」，中・高学年では「日記」「紀行文」「感想文」「研究記録文」「手紙」などである。

低・中学年の「日記」には，「あさがおにっき」「ひよこ日記」「夏休み日記」などがあり，観察記録文や報告文の萌芽を含んでいる。高学年でも「俳句日記」「旅行日記」など多数掲載されており，当時どの学年でも日記指導が盛んだったことを裏付けている。

10年間に掲載数が伸びた「研究記録文」「調査報告文」等は，子供らしい課題意識に貫かれた力作ぞろいである。作文に付された資料もスケッチ・図表・写真・地図等，今読んでも遜色のない作品がそろっている。これは，低学年で生活文や日記等の指導が浸透し「書くこと」の習慣形成が進んだことを土台に，中・高学年で論理的文章系列に対する指導が軌道に乗り始めたことを示すものといえる。その道筋をつけた『作文宮城』の啓発的な役割は大きかったことが予想できる。第10号の編集後記では，応募作品が全県下に満遍なく渡っていることが話題にあがっている。

また，「生活文」への偏りや書き方の改善を働き掛ける指導言は，創刊号から毎年粘り強く継続された。2－2（2）で取り上げた，論説文や紀行文に比べて，生活文や日記・手

紙・詩の自己表現系に良い作品が少ないといった辛口の評価は，全学年で見られた。長く書けたことに満足するのではなく，目標に鑑みて明確な主題・構成・相手意識をもち，主題や中心を掘り下げること，言語感覚を駆使し言葉一つ一つにこだわって俳句や詩を生み出すこと，その原動力は教室での確かな指導にあることを訴え続けた。

創作文の系列では，俳句や劇の脚本，映画やラジオ番組の感想，リレー童話，伝説集など，国語の学習・教科書教材から生まれた作品が取り上げられている。これらは，作文の時間に子供が協働的に楽しく取り組める開発的な言語活動としての価値をもつ。同時に，児童にとっては声に出して楽しく読めるものだったに違いない。脚本は書いて終わりではなく，声に出し演じることでそのおもしろさが共有できる。

さらに，複数の推薦文の提示によって，児童に文章ジャンルを意識させる取り組みがなされたことも注目される。目的意識や相手意識を念頭に置きながら文章を書くことによって，書き手の思考は先鋭化・焦点化され，確かさと深さが増す。記述前にまず主題意識を明確にもつために，書こうとする目的を押さえる必要があるが，この書く目的は作文の場合，各ジャンルに直結している。読み手を喜ばせ楽しんでもらうための創作文，調査して分かったことを分かりやすく伝えるための調査報告文といったことである。

必要に応じて様々な文種の文章を書ける力をどの子にも付けていくための試みが，この草創期においてなされていたことを忘れてはならないだろう。

3－2　書き方を身に付け活用を促進させるための編集の工夫

文集は，発行の目的により大きく三つに分けられる。一つは，作文教材として活用するため，学習の手引きやヒントをつけ文種別･学習目的別編集をする「教材集」としての文集。二つ目は，散逸を防ぐための集録として全員の作品を載せた記録･作品集としての文集。三つ目は，入学や卒業記念，学校創立周年記念など記念碑としての文集である（＊21）。

『作文宮城』は，『作文風土記みやぎの子ども』『東日本大震災記録集　あの日の子どもたち』等を特別号として併せて発刊してきた。それらも含め，主な目的は県内児童の優秀作文を編んだ「作品集」としての役割が大きい。したがって，作品集とならざるを得ない地域文集の性質を踏まえた上で，それを編集の工夫によって「作文学習書」「教材集」として機能強化していくことが求められると考える。

『作文宮城』第10号の「君のページ・あなたのページ」のように，読者の着想メモを自由に書き留めたり，編集者や書き手と手紙や質問等でつながったりできるページの発想は，アメリカの作文教育の考え方に通じる面がある。一人一人の個性や書くプロセスを重視する作文学習ソフトが広く実践されているアメリカの小学校では，自分の書いた文章をステップごとにメール等で送りコメントをもらいながら次のステップに進んでいく。総じて文章を書くことそのものより，書く前の話合いや文章を書いた後のコミュニケーションに指導の力点を置き，文章を書くことは自己を表現するためのプロセスの一つという考え方が貫かれている。それは読まれない文章を作らせてはいけないという考え方に基づく。

第4号以降ジャンル別書き方のヒントを記したコーナーの挿入や，ジャンル別の複数推薦文の掲載なども，発達段階に応じて積極的に試みられた。これらを発展的に継承し，児童に書き込む楽しさを提供したり，ジャンル別書き方の手引きを挿入したりして，児童が国語の学習で活用できるようなものになっていくことが望ましい。その中から，次年度の参考作文例が生まれていくといった好循環が生まれることで，「教材集」としての色合いが少しずつ強まっていくのではないだろうか。

4　文集活用のアイディア

最後に，今後国語科授業での文集の活用促進に向けたアイディアを箇条書きに記す。

4－1　国語の「書くこと」授業での活用例

① 文集を読んで最も気に入った作品を一つ選び，作者宛に理由・根拠を明らかにした手紙を書く。

② 教科書の作文単元に関連するような作品を教師が選び，全員で読んで良さについて話し合った後，その良さや特徴を生かして作文を書く。

③ 編集者への質問または感謝の気持ちを伝える手紙や，文集のありたい姿について自分の考えを意見文に書く。

④ 様々な教科書「書くこと」単元の学習成果物（レポート・俳句や短歌等）を掲載し，授業の際の参考作品とする。

⑤ 文集の歴史や良さを紹介する紹介文またはアピールする推薦文を書き，他地域の地域文集・児童詩集等と交流する。

⑥ 文集の作文や詩を読んだ後，「例えば○○な人に読んでほしい作文集（詩集）」として，アンソロジーを作る。

4－2　国語の「読むこと」「話すこと・聞くこと」授業での活用例

① 教科書の中心教材読解後に行った多様な言語活動の成果を掲載し，授業の際の参考作品とする（「○○日記」リーフレット・本の帯やポップ・ブックトークやインタビューを基にした紹介文や読み原稿等）。

〈 「ごんぎつねブックトーク」の例 〉

今から「心の通い合い」というテーマで，4冊ブックトークを始めます。

初めに紹介するのは，「ごんぎつね」です。いたずらばかりしていたごんぎつねは，うなぎのつぐないを始めますが，…兵十にうたれて死ぬ直前にやっと少し心が通い合います。

…2冊目は，「泣いた赤おに」です。母から勧められた本です。　（略）

…3冊目は「幸福の王子」です。図書館の司書の先生に教えてもらいました。　（略）

…4冊目は「百万回生きたねこ」です。友達が読み聞かせをした本で私も好きな本です。

…4冊の本を通して，私は ～ ということについて深く考えることができました。

② 「今日の詩（作文）」として，学級全員が音読・朗読したい作品を一つ選んでおき，1年間に最低1回はみんなの前で理由を添えて音読・朗読する。

③ 身に付けたい言葉の力を付けるためにどんな言語活動がふさわしいか，主体的に考え判断させるために，掲載作品を読んで学習計画を話し合う。また，身に付けたい力を基に一連の学習を振り返らせ，成果や課題を自覚できるところまで誘う。

5　成果と課題

本研究の成果は以下のとおりである。

① 地域文集『作文宮城』の草創期の様相を，文章ジャンルや評価言，編集の工夫の面から明らかにしたこと。

② 草創期の試みを現代的意義の面から考察し，作品集にならざるを得ない地域文集の今後の可能性を示唆したこと。

作品集は指導者の予想に反して，児童生徒にとっては学習材になりにくい。そのため，地域文集も学習材になりうる編集を意図的・計画的にしていく必要があるだろう。これからの課題は，国語科の「書くこと」授業で利活用されるような学習作文集の開発や作文指導の実践構想である。

謝辞

研究資料として『作文宮城』の関係資料を快く貸与していただきました きた出版の北村哲也様に，心から感謝の意を表します。

引用・参考文献

1　大内善一：戦後作文教育史研究,p442,教育出版センター,1984
2　昭和26年版（1951）改訂版―小学校学習指導要領国語編（試案）『国語能力表』,文部省,1951
3　大内善一：戦後作文・生活綴り方教育論争,明治図書,1993
4　作文風土記 みやぎの子ども「作文宮城」第20巻学制百年記念,pp53-54,宮城県小学校国語教育研究会,1974
5　作文宮城第4号5・6年編1956年刊,p105 宮城県小学校国語教育研究会,1956
6　国語研究紀要第1号，座談会『作文宮城』のことについてpp60-64,宮城県小学校国語教育研究会,1964
7　大内善一：地域文集の編集及び活用方法－文集「よこはま」を手がかりとして－,全国大学国語教育学会発表要旨集№91，p16全国大学国語教育学会,1996
8　本澤淳子：地域文集を教材とした「書くこと」の指導研究：「生活文」指導の再考 共立女子大学家政学部紀要第63号,pp143-151,2017
9　作文宮城第3号5・6年編1955年刊,p3 宮城県小学校国語教育研究会,1955
10　作文宮城第1号1・2・3年編1953年刊,巻頭言p1,児童作文pp84-86,作文を読んでpp81-82，宮城県小学校国語教育研究会,1953
11　今野和賀子：山内才治の綴り方指導論の現代的意義－雄勝小・宮城師範附属小での綴り方教授を中心として－,もくせい43号,pp48-55,宮城教育大学附属小学校研究部,2003
12　作文宮城第10号5・6年編1962年刊,p128，宮城県小学校国語教育研究会,1962
13　作文宮城第4号5・6年編1956年刊,pp15-16，宮城県小学校国語教育研究会,1956
14　福田梅生：生活文,国語教育研究大辞典,国語教育研究所,pp544-545,1991
15　昭和22年版（試案）学習指導要領国語編,文部省,1947
16　作文宮城第4号5・6年編1956年刊,p58,書き方のヒントp25･40,宮城県小学校国語教育研究会,1956
17　菅原稔：戦後作文教育における「生活文」の位置と意義,月刊国語教育研究375,pp34-37,日本国語教育学会,2003
18　作文宮城第10号5・6年編1962年刊,p127,宮城県小学校国語教育研究会,1962
19　小学校学習指導要領国語編,文部科学省,2008
20　作文宮城第9号5・6年編1961年刊,p39,宮城県小学校国語教育研究会,1961
21　増田信一：文集,国語教育研究大辞典,国語教育研究所,pp747-749,1991